

ア ン ダ 考

磯 野 富 士 子

「モンゴル秘史」のなかでも、テムジン・チンギスとジャムの親交と対抗関係は、文学的にも最も興味のある部分の一つであるが、この二人の結んだ「アング」というのは、はたしてどういうものだったのであろうか。

一 アングの定義

欧米の学者による『モンゴル秘史』あるいはチンギス・ハーンに関する訳書・研究書では、アングは殆ど常に「義兄弟」(sworn brother; frère jure, noapatim)と解されている。また、ヨーロッパの文献が利用されるようになってからは、モンゴル・日本・中国の解釈にも、「義兄弟」が見られるようになった。しかし、アングとは、はたして本当に義理の兄弟つまり血縁関係の擬制だったのであろうか。

まず第一に、漢字転写による『モンゴル秘史』には、安答(時には安達)の傍訳は、「契交」または「契合」と

ある。『元史』本紀一では、按答の語が最初に出てくる箇所で「按答華言交物之友也」と説明されており（商務印書館、第一冊、第六葉。中華書局、第一冊、二三頁）、この注は『聖武親征録』の割注にも、そのまま踏襲されている（二十二葉）。

また、那珂通世訳『成吉思汗実録』の割注にも、「安達は、親交なり。『元史』太祖紀、安達の注に「交物之友」とあり、畏答児の伝に「按達者、定交不易之謂也」とあり。」とされている（七五頁）。昭和八年に出版された、陸軍省編纂の『蒙古語大事典』上巻、蒙和之部にも、「一 親友、二 同僚、三 同類、四 戦友」となっている。一方、一四世紀はじめに、イル汗国の歴史家ラシッド・ウダイーンによって書かれた『集史』のロシア語訳には、アンダは「нопарим (anda)」と、やはり「義兄弟」となっている。しかし、この『集史』をひろく使っているアルメニアの史家ド・オソンの『モンゴル帝国史』（一八三四―五年）では、アンダは「盟友 ami-jure」とされており（巻一、五二頁）、『集史』ロシア訳の「義兄弟」も、あるいは訳者の解釈によるものではないか、と疑わせる。コヴァレフスキーの『蒙・露・仏辞典』（一八四四年）にも、アンダは「僚友、仲間」などとあって、「義兄弟」は見あたらないのである。

モンゴル人民共和国の科学アカデミー会員П・ダムディンズレンによる『秘史』の現代語訳は、アンダを「*noho* *hōkōp* (auu)」と訳している（四六頁）。andはアンダの新しい書きかたであるが、この「心を許した僚友」というのは一言説明を要する。護雅夫氏の研究などによって、『秘史』におけるノホル（ネケル）は、「僚友」といっても実際は主君に従属する身分にあることが、明らかにされているが、現在のモンゴルではノホルは社会主義国の「同

志、タヴァリシチ」にあてられ、ノホル・スターリンなどという具合に使われる。友達関係では普通相手の名前だけで呼びあうので、ノホルは一種の敬称になった感さもある。一方、ノホルは配偶者の意味にもなっている。ダムディンスレンの現代語訳にアングがカッコ入りでつけてあるのは、この語が今の日常語からは消えていることを示しているようだ。

煩わしさを避けていちいち枚挙しないが、近年の中国やモンゴルの研究には、「誓結為弟兄」「換帖弟兄」の解釈も出ている。フフホトで出版された、道潤梯歩の「新訳簡注『蒙古秘史』」には「盟友或同盟者」とあるが（五六頁、注四）、額弥登泰烏の「『蒙古秘史』詞彙選釈」では、安達の項には「契友」とあり、『蒙文総彙』の「賓友」をあげ、なお「義兄弟、近友、朋友（与其他部族之間相互關係）（ハ布俄√五二）」として、義兄弟が入っている。ここで「布俄」としてあるのは、『ブリヤート・ロシヤ語辞典』（一九七三年）のことで、ケンブリッジ大学のC・ハムフリー博士に調べてもらったところ、この「義兄弟」はнопарамの訳そのままであることが確かめられた。

アングが義兄弟であるか否かは別として、以上の資料に共通なのは、それが誓約によって結ばれた関係であることだ。フフホトの二書もアングを「andagar 做誓」と関連させており、「秘史」第一〇八節に出てくる andagai-*chi* が、アングになることは全く関係なく、友軍の集合の約束を指していることによっても、アングは盟約から出ていると考えてよさそうだ。護雅夫氏のご教示によれば、トルコ語ではandはすべての契約を意味しているとのことであり、現在のモンゴルでも誓約は andgai, andgar である。

王国維は、安答について『遼史』のなかから二人の男が緊密な関係を結ぶ例を四件あげて、「按答一語或即自契

丹語出也」と推量している（『觀堂集林』卷一六、史林八、二六葉）。しかし、王国維のあげる四例には、アングあるいはその關係を現わす特定の語は見出せない。もちろん『遼史』にある風習がモンゴルのアングと共通の起源から来ていることは、大いにありうるが、王国維のようにアングの一語を直接契丹に由来すると見るのは、どうも納得できかねるのである。

二 アングと義兄弟

以上のように、ヨーロッパ系学者の大多数がアングを義兄弟としているのに反して、『秘史』をはじめとする古いモンゴル・中国の文献はアングを同盟者と解している。この相違は、英語その他の brother と、日本・モンゴル・中国の言語における「兄弟」の關係に内在する決定的な違いから出ているように思われる。英語で like brothers といえ、親密かつ平等の關係を意味するのに対して、日本語などの兄弟では、一方が必ず兄で他方が弟であり、不可避免的に上下の序列を内包する。つまり、日本語などには、単数の brother にあたる言葉がないのである。

もちろん、別に長幼を決めずに漠然と「兄弟のように仲よくする」ことはできるが、義兄弟となるとそうはゆかない。有名な『三国志』の最初に出てくる桃園の結義では、義兄弟となった三英雄はただちに誰が長兄、次兄、末弟になるかを決めている。『三国演義』のモンゴル訳（北京、一九〇八年）で、蒙漢両語に通じているハラチン族出身の訳者は、このくだりを「三人で兄弟の契りを結び（*gurbagula akha degüü barïdan*）としているが、もしモ

ンゴル人の間でアンダが義兄弟を意味するなら、当然ここでアンダの語が使われそうなものだ。

日本の「兄弟」と同様に、モンゴル人がヨーロッパ語の brother を示したい時には、一人のことも akha dūu と複数にしなければならない。例えば、『秘史』には、ジャムカがオン・カンにチンギスのことを中傷するのを聞いたグリーン・バートルが、「甘言を弄して(まで)、どうしてあのように真面目な兄弟に悪態をつくのであらうか」と歎く箇所がある(一六〇節)。ここでは明らかに「兄弟」とはチンギス一人のことを指しているものであり、チンギスとジャムカの関係について「兄弟」の語が使われているのは、『秘史』を通じてここしかない。第二一〇五節で、テムジンは「ジャムカ弟」という語を発するが、これは彼がオン・カンの「ジャムカ弟に告げよ」と言った言葉をそのまま伝えたのであり、そのすぐ前にあるテムジン自身の言では「ジャムカ・アンダに言え」となっている。

一方『秘史』には、血縁のない二人の男が兄弟と呼びあう例はたくさん出てくる。チンギスの父イエスゲイ・バートルが一族の長として「兄」と呼ばれていたばかりでなく(第六九節)、オン・カンとジャムカは兄弟と呼ばあっている。さらに顕著の例は、チンギスが「弟のトオリルにいえ」として、「汝を弟と呼ぶ謂れは」トオリルの先祖が自分の先祖の私僕であったからだ、と説明するところである(一八〇節)。これを見ても、兄弟の上下関係は明らかであろう。(ただしこれらの場合でも、当事者たちが正式に義兄弟の契りを結んでいたわけではない。モンゴルでは今でも親愛の情を表わすために、さほど深い仲でなくても、年令の上下に応じて兄弟、あるいは父子を使うことをつけ加えておく。)

これと対照的に、チンギスとジャムカは決して相手に対して、あるいは相手について、兄・弟アス・ドゥウを用いず、一貫してアンダを相互に使っている。アンダと兄・弟アス・ドゥウ関係の対比は、モンゴル部とケレイト部の関係にも現われる。ラシッドの『集史』によれば、オン・カンの祖父サリク・カンの時代には、いまだ未開で獐猛であつたモンゴル部はサリク・カンの下で戦い、ケレイト部の勃興に大いに寄与したので、サリク・カンはモンゴル部を弟ドゥウと呼んでいた（第一巻、上、一一三頁）。ところが、オン・カンの頃にはケレイト部は内紛によつて分裂し、オン・カンはイエスゲイ・バートルの援助により、離散した部民を集めてその長になることができた。そこで、オン・カンはイエスゲイとアンダの契りを結ぶ。つまり、ケレイト部はもはやモンゴル部を目下扱いにはできなくなつたといえよう。

父とオン・カンの関係により、チンギスはオン・カンを「父」エチゲと呼び、オン・カンはチンギスを「息子」フと呼んだ。これを根拠として、アンダ関係は相続される、とする説もあるが、アンダを血縁関係の擬制と解した結果であろう。しかし、この二人が相手に対してアンダの語を用いる例は一つもなく、チンギスにとつてオン・カンはあくまでも父のアンダであり、父と同格であつた為には彼にとつては世代を異にする長上となる。

再び苦境におちいつたオン・カンをチンギスが礼をつくして迎え、ケレイト部再興のために援助した時、オン・カンは大いに感謝し、改めてチンギスを「息子」フと認め、同時に自分の一人息子であるセングンの「兄」アスとする（第一六四節）。しかし、『秘史』に見るかぎり、チンギスは一度もセングンを弟ドゥウとは呼ばず、彼に使者を送る時には「セングン・アンダ」と呼びかけている。ただし、チンギスに敵意を抱くセングンの方では、チンギスは「わ

し（のこと）も何時アンダなどといっていたのか」と反発する（第一八二節）。これを見ると、兄・弟と同じくアンダの語も、正式な儀式をしない場合でも同格の者に対する親愛の情を示すために用いられたようである。

アンダを義兄弟ではないと考える第二の理由は、『集史』のなかで、アンダは非常にしばしばアンダフダという形で現われるからである。フダ（khuda）というのは、それぞれの息子と娘を結婚させた二人の男の関係を指す。ハムフリー博士によれば、プリアートでは現在でもアンダ・マンダという語がこの関係を意味するそうである。もしアンダが頻繁にフダであったとすると、族外婚がきわめて厳格に守られてきたモンゴル系部族が、アンダを擬制的血縁と考えていた可能性は少ない。

『集史』のなかで、チンギスは或る小部族を制圧した後で、彼らに向い「われわれは親戚・兄弟のようになろう。われわれモンゴル人はお互いの娘を嫁にとることをしない。従ってわれわれ部族の間でも通婚はしまい」と言っている（巻一、上、一六六頁）。ここでどちらの部族が兄であるかは論をまたない。なお、ロシヤ語訳では、原文にアンダが使われているところでは、義兄弟と訳しながら常に（anda）と原語がつけ加えてあるにも拘らず、この箇所の「兄弟」の後にはアンダの挿入が見られない。

モンゴル族の族外婚を示すもう一つの例をあげると、モンゴル人民共和国の『通史』には、オン・カンとイエスゲイがアンダになったことにつき、「事実、ケレイト部とアンダの関係を結ぶのは、この時に始まったことではない。サリク・カンはモンゴルを弟と呼び、ケレイト部とモンゴル部の通婚を禁じた」（巻一、一八三頁）とある。サリク・カンがモンゴル部を弟と呼んだことは、先にのべた。しかし、両部の通婚に関する『通史』の解釈には

問題がある。『集史』を見ると、サリク・カンが弟であるモンゴル族に、「アンダとなり親戚となった者以外とは、フダになるな」と云っているのである（第一巻、上、一一四頁）。この場面の背景を述べると、サリク・カンは自分の息子をベトキン・ナイマン部のプユルク・カンの娘と婚約させたが、後にプユルクがこの縁組を自分の野心を満たすために利用する気であったことを知り、大いに後悔して、相手の誠実さを信頼できる場合以外には、決して軽々しくフダとなるな、と警告しているのである（村上訳『秘史』巻二、三二—三三頁参照）。『集史』のロシア訳では、親戚にあたる語は *poctpehnik*、つまり血縁を示す語が使っており、これだけ見るとアンダは擬制的血縁関係ともとられようが、そうなると、サリクの言は族内婚をすすめていることになる。この訳語は、アンダを義兄弟とする訳者の先人観から来たものではあるまいか。それと同時に、現在のモンゴル学者が、『集史』のこの箇所を「モンゴル部との通婚を禁じた」解釈しているのは、モンゴル人のなかに伝わる族外婚の觀念の強さを現わしていると云えよう。このサリク・カンの言は、また、二つの部族が継続的に婚姻関係を結ぶモンゴルの風習ともつながっているように思われる。

陸軍省の『蒙古語大辞典』にも、満州語系の用法として、アンダ「フダ」が「遺取り婚礼」、つまり「自分ノ兄弟ヲ妻ノ姉妹ニ遺ル」関係と説明されており、*anda bariho* は「義兄弟になること」となっている。しかし、同「和蒙之部」に義兄弟は「フダ」としてあるところを見ると、ここでは、義兄弟といっても *brother-in-law* の意味で、*sworn brother* でないことは明らかである。そして、これはまた、アンダとフダの密接な関係を示すもう一つの例といえよう。

なお、オン・カンとチンギスの「父子」関係の性格については、『秘史』と『集史』で矛盾する記載もあるが、これは他の機会に論ずることとする。

アンダを sworn brother とする説に賛成しない第三の理由は、『秘史』にも『集史』にも、アンダとなる際の儀式に擬制的血縁関係を象徴するような行為が一切記されていないことである。スキタイの黄金装飾品には、二人の男が木の下で一つの杯から一緒に飲んでいるものがあり、義兄弟の盟約と解釈されている。また、ヴァイキングは義兄弟となる時には、各々の血をとり、それを一緒に流したという (Foot & Wilson, 四二—三頁)。モンゴルでも、自分の誓約が誠実であることを示すために、自らの指を傷つけ、その血を相手に送る例はあった (『秘史』第一七八節)。しかし、アンダの盟にはそうした儀式は見あたらない。

ペリオは『聖武親征録』の仏訳につけた注で、アンダになるためには、「先ず贈物を交換した。しかし、おそらく続いて誓約の杯を、必要とあらば誓約者たちの血を少量加えて、飲んだであろう」と推論している (二三二頁、注一)。これは、アンダを義兄弟とするペリオとしては当然な推測であるが、チンギスとジャムカが、幼時に大人のまねをして、アンダとなったのを想起して、改めてアンダの盟約を結んだ時にも、続いて祝宴が催されるものの、両人が特別に杯を交わした様子はないのである。

これに対して、アンダ盟約に必ず詳述されているのは、贈物の交換であるが、もしアンダが義兄弟の契りであったのなら、贈物よりもさらに本質的な儀式であるはずの「血を混ぜた杯」について、何の言及もないというのは、どうも理解できかねるところである。

三 アンダ關係の対等性

『秘史』のなかで、アンダは常に相互に用いられている。これが兄・弟^{スブドゥー}とは決定的に異なる点である。つまり、この關係からは上下の區別が排除されている。リーズ大学のU・オノン氏によれば、彼の屬する旧滿州のダグール族の間では、狩獵に出かける時には隣接のオロチョン族の人と二人で行く。ダグールが鉄砲などの狩獵用具と糧食などを用意し、オロチョンは道案内と獸を狩る際の顧問格になる。二人はこの狩獵行におけるアンダであり、獲物は二人の間で平等に分配される。ダグールがオロチョンを案内人として連れてゆくのではなく、二人は全く対等である。ダグール方言は『秘史』に出てくる古い言葉を沢山含んでいるとのことだが、そうすると、ダグールのアンダは、チンギス時代までモンゴル族の間に行われていた軍事・政治同盟の名残りではないかとも、推測されるのである。そして、プリアート族におけるアンダの定義に「他部族出身の親友云々」、という説明があることも関連して考えられる。

対等な同盟者としてのアンダは『秘史』に現われるノホルの身分と対比することができる。ノホルがその元來の「仲間」という意味にも拘らず、首長に従屬する側近の臣であつたことはよく知られている。しかし、彼らのもとと自らの出身部族と關係なく、傑出したリーダーの周囲に結集した男たちであり、『秘史』のなかにも初期のノホルの性格を示す箇所が見られる。

チンギス（テムジン）が盗まれた馬を探しに出かけ、馬群の番をしていた少年ボオルチュに会い、彼を最初のノ

ホルにした話は有名であるが、この段階では「ノホル」はまだ相互に使われ、ボオルチュの方でもテムジンをノホルと呼び、テムジンが二人で取戻した馬を分配して返礼しようとする、ボオルチュはそれを受取らない（第九〇、九三節）。そしてテムジンは後に弟を派遣し、「互いにノホルとなろう」と云ってボオルチュを招く（第九五節）。ところで、ここで使われているのは *nökhöce* という動詞形であり、これは片方が臣としてのノホルになることを意味しない。テムジンはメルキト族を破った後、「わが父なるカンとジャムカ・アングの二人に僚友（とも）になつていただきたい」と感謝するが、こゝも *nökhöcekdejü* という表現が使われている（第一二三節）。この動詞形の用法は、ノホルの地位が低下した後にも、しばしば見られる。

しかしながら、テムジンが即位してチンギス・ハーンとなつてからは、ボオルチュさえも彼をノホルと呼ぶことはない。ノホルの地位が臣下として固定される過程は、軍事的性格を持つ部族集団が小王国に発展してゆく過程の一面に他ならない。ウラジミルツォフはノホルは自由に主君のもとを去ることができた、としている（八九頁、邦訳二二六頁）。しかし、テムジンとジャムカが決裂した後で、多くの首長が自分の部族をひきいてジャムカを離れ、テムジンの陣営に移つて来たのは、まだその頃は後の両英雄の地位も、他の部族長たちと隔絶した差を持つものではなかったと見る方が当っているようだ。

ところが、チンギスの優位が確立してからは、ノホルの鞍がえが正当化されるのは、前首長が死んだ後か、あるいは決定的に没落してしまつた場合に限られてくる。主人を無事に逃してから敵将チンギスに投降してきたノホルは快く迎え入れられた（『秘史』、第一四九節）。

P・S・ユシコフは九—一〇世紀のキエフ公国、六—九世紀のアングロ・サクソン、帝国設立以前のモンゴルの社会に見られる共通点を論じているが、その一つに、キエフ公国の *дружинник*、アングロ・サクソンの *gesithas*、モンゴルのノホルをあげている。これらはみな元来は「仲間」を意味したのが、首長の地位が確立してからは、彼に従属する親衛兵になったものである。アングロ・サクソンの叙事詩「ベウオルフ」では、「首長を失った後で」首長を殺した敵に従った人々を罵ってはならぬ、として「それは主を失った者の必要が、彼らを余儀なくそうさせたからだ」と説明する（ベンギン版、八五頁）。この箇所は、*gesithas* について歌ったものであり、モンゴルのノホルにもあてはめて考えることができよう。首長を失ったノホルは、他の首長を見つけるより外に、生きてゆく道はなかったからである。

ノホルの裏切りが、時には死をもって罰せられたのに反して、『秘史』の記述では、アンダの盟約を結んだチンギスを何度となく裏切り、遂には彼の仇敵となったジャムカは、きわめて寛大に、むしろ好意的にさえ描かれている。そのために、グミリヨフは『秘史』の著者はチンギスに抵抗したジャムカの支持者であったと結論する（四六五—七〇頁）。しかしこれは、次節で論ずるように、ノホルと異なり、アンダを対等の同盟者と考えれば、よりよく説明できよう。

アンダの対等性は、アンダの盟を結ぶ時の贈物交換を理解するカギともなる。『元史』の原注には、アンダは「換物之友」とあり、王国維も「按蒼云者必以易物為訂交条件」といっている（『觀堂集林』一六卷、二五葉裏）。つまり、アンダになるには贈物の交換が儀式の中心のようである。物質の乏しかった社会では、貴重な物品、殊に優れた

武器や名馬を送ることは、相手方の勢力・攻撃力を高めることに他ならず、よほど気を許した相手に対してでなければ、できる行為ではなかったらう。

古いヴァイキングの詩は、「贈物の交換は友情の決定的要素」であることを示しており、そのような贈物を貰った者は、それを受取ることによって、それに対応する返礼をしなければならず、これは地方によっては法律に書かれていたそうだ (Fote & Wilson 四二三頁)。また、東アフリカの遊牧民のなかには、血縁外のグループの成員と、個人的契約を自発的に結ぶ風習が見られ、それは「贈物の交換によって締結される」という (Bonte 二五頁)。対等の贈物交換が対等な契約を固めるものであるのに反して、一方的に贈物を受取ることは、従属の印となる。アングロ・サクソンの詩歌では王は常に「宝物を与える」もしくは「分配する」者と呼ばれており、「ベウォルフ」にある「戦いの中、輝く剣により、恩賜の宝に、われは報いぬ」(二三九頁)、という句が示すように、王よりの下賜品は王の為に戦う義務を課したのであった。

それにしても、王が一人でこうした宝物を分捕ることはできなかったはずだから、これは、部下の戦利品はすべて王に帰属することを明らかにしている。フン族の間でも分捕品はすべて首長に属する、とする風習が見られた (Honegar 一〇七頁)。タール族との戦いを前にして、チンギスは兵の軍律を申し会わせ、「敵に打ち勝つもの、財物^{たから}のところに立ち停^{とど}まるまいぞ。勝ち終うれば財物^{たから}は「みな」われらのものなるぞ。「必ずや」われらは分かち合^あうぞ」(第二五三節)、と命じているが、この掟は分捕品は首長に帰属する、という定め^{さだめ}の起源を示す。

もし兵に各自の捕獲品の所有を許したなら、兵は敵を追撃するよりも捕獲品のかき集めに熱中するだろう。し

かし最初はグループ全体のものとして分配されていた戦利品も、リーダーと彼についてきた者たちの間の身分の差が広がるにつれて、リーダー一人の占有となり、忠勤の報酬として部下に分け与えられるようになったにちがいない。モンゴル軍が金国の都を攻略した頃には、降伏した都城の中にあるものはすべてチンギス・ハーンのものである、として、金の官人が献じた宝物を受取った將軍たちは、チンギスから厳しく叱責されるのである（第二五二節）。

アングの盟を結ぶ時に交換される贈物が同等のものであることも、アングの対等な地位を象徴している。幼いテムジンとジャムカはオノン河の水の上で羊のくるぶしの骨をオハジギにした玩具を取りかわし、またその翌年にはカブラ矢を交換した。そして成人してからアングの盟を正式に結んだ時には、いずれも戦利品である黄金の帯と名馬を贈りあった（第二一七節）。

アングの対等性は、王国維があげている『遼史』の例によって反論されるかもしれない。その第一の例は、聖宗と斜軻が「於太后前易弓矢鞍馬、約以為友」（本紀卷十、聖宗一）という箇所である。皇帝に対等者はいないわけだが、もしこれがアングと同様の関係であったとしても、この時、統和元年八月（九八三年）には聖宗はまだ十四才で遼の王朝の地位も固まらず、太后が幼帝のために、有能な官吏でベテランの武人である上に、やはり耶律氏の一族でもある斜軻を、幼帝の後盾に確保しておきたかったのであろう。この二人が帝と臣であるにも拘らず、「為友」となっているのは、君臣の契りとは異なったニュアンスがあったことを示すようだ。

王国維の第二の例は、「以麻都骨世勲、易衣馬為好」（本紀卷一五、聖宗六、開泰四年六月—一〇一五年）である。

この麻都骨については、その人物を明らかにできずにいるが、その名を見ても、また聖宗は辺境の民族と友好關係を結んで、王朝の安定を図ることに特に心を用いた（『契丹史略』七二頁）、という点からも、麻都骨は辺境外部の首長であつたろうと想像される。弱小国の君主をあたかも対等のように遇するのは、外交儀礼の常である。ただ、この「為好」がアングのような特別な關係であつたとする根拠は見あたらない。

なお、王国維自身「必以易物為訂交条件」としているにも拘らず、彼のあげる他の二例は、贈物の交換につき全くふれていない。ただ、王国維もアングについて「義兄弟」という關係を考えていない事實は、中国の古典のなかで、アングがそうは理解されていなかったことを証明している。

こうして見ると、『秘史』に、幼いテムジンとジャムカが大人の真似をして、「アング人とは、生命^{いのち}一つで相捨つることなく、『常に』生命の守りとなり合うものぞ」、といて仲よくしてきた（第一一七節）とあると、アングになるとは、緊密な相互援助の同盟を結ぶことを意味した、と解すべきであらう。

四 モンゴル統一とアング關係

アングを相互援助を目的とする対等な同盟關係であると考え、チンギスとジャムカが、アングの契りを結びながら、なぜついには仇敵として相對するようになったのか、さらには、なぜ度重なる裏切りにも拘らず、『秘史』ではジャムカがどのように好意的に描かれているのか、の理由も説明できそうである。

モンゴル族がまだいくつもの独立した部族に分れて、それぞれの首長にひきいられていた時代には、これらの

首長たちが同盟を結んで共通の敵にあたる、あるいは協力して他の部族の脅威を防ぐ、というようなことが、常に行われていたにちがいない。『集史』のなかで、ラシッドがモンゴル各部族の歴史を述べている部分には、ある部の長ともう一つの部の長がアングであったことが、しばしば記されている。そして、それらがよく「アング・フダ」という形で現われることは、前に言及したとおりである。

しかし、いくらアングになり、重ねてフダになっても、群雄割拠の時代には、状況が変れば、昨日の敵は今日の友となり、今日の同盟者は別の首長、あるいは敵の首長とさえ組んで、戦いをしかけてくるかもしれない。もとの英領スーダンで、半遊牧民のヌエル族を調査したエヴァンズ・プリチャードは、「しばしば天の神にかけて結ばれる、部族間のこうした軍事同盟は……中略……永くは続かない。このような同盟を結ぶ道義的な義務はなく、共同闘争といっても、各部族は、それぞれの首長にひきいられて別々に戦い、各々の陣で生活する」(一二二頁)、と書いているが、これはそのまま、統一達成以前のモンゴルにもあてはまる。

部族社会がまだ細分されていた頃には、複数の部族の上にたつ超越した權威は存在しなかったから、一方が誓約を破っても、彼を罰する權威を持つ者はいなかった。神あるいは天が盟約の証人とされていようと、特にモンゴル族古来のシャーマン教にあっては、部族の神は祖先の霊であり、各々の子孫の安泰に責任をもつことになっていたのであるから、中立の審判者とはならない。

もちろん誓約を破ること自体は誉めたことではないとされていたのであろうが、いわゆる「^{レゾン・ダ}国家理性」に加えて、域界を持たない遊牧社会にあつては、有能なりーダーと強力な同盟者を持つのが、何よりの安全保障であり、

一族の存亡はひとえにそれにかかっていたから、無能な同盟者を捨てて、もつと頼りになる同盟者と組むのは、当然のこととして容認されたのであろう。一族の首長にとっては、最適の同盟者を選び、また状況に応じて同盟者を取りかえるのは、部族員に対する首長の義務でさえあったろう。テムジンとジャムカが最初に対立した時、多くの首長が部族をひきいて、ジャムカの側からテムジンの側に移って来たのは、まさにこういう現象であったと思われる（『秘史』第一二〇、一二一、一三〇節）。

一方ジャムカ自身も同じ理由からオン・カン捨てた。オン・カンがチンギスと戦いを交える事になった時、オン・カンはジャムカに全軍の指揮を委ねようとしたが、ジャムカはテムジンに対抗することができずにオン・カンのもとに来たのに、その自分に頼ろうとするオン・カンに失望し、「これで」オン・カンがわしよりもはるか劣った人物である「ことがわかった」、「つまり」凡庸な僚友^{ノホル}でしかないのだ」と悟った。そしてチンギスの方へ走ろうとはしなかったものの、オン・カンの陣営を離れ——つまり戦線離脱して、オン・カンの弱点を暴露する事実を、チンギスに伝えてやったのである（第一七〇節）。ジャムカは同様のことを、ナイマン部のタヤン・カンとチンギスとの戦いの時にも、もう一度繰り返して、チンギス軍の勢いに怖じるタヤン・カンを見捨てた。この時には、チンギス側の将軍たちの勇猛さを述べたて、タヤン・カンを積極的におどかしさせているのである（第一九五、一九六節）。

遊牧民の統合がある程度進んだ段階で主要な部族の長たちが集ってカンを選出する習慣があったことは、遊牧民にとっては、血統よりも、個人的に有能な人物をリーダーとすることが、いかに重要であったかを示している。

部族の首長たちが自分たちの中から、そうした人物を選ぶ権利を持っていたことは、同時に、少くとも初期のたてまえとしては、そのリーダーが期待にそわなくなった場合には、彼を交代させる、あるいは彼の下を去る自由を内包している。つまり、初期の部族連合体にあっては、選出されたリーダーと彼を選んだ他の首長たちの關係は、主従というより同盟者に近かったと見られる。ムンクエフは、チンギスまでの、モンゴル人の間では、カンは戦争の時のリーダーで、しっかりした制度的なものではなかった、と云っている（三五七頁）。この段階では、ノホルもまだ一応同格の仲間であったことは、ジャムカがオン・カンを「凡庸なノホル」として見捨てた時のノホルの用法によっても明らかである。そして、この時代のノホルについては、ウラジミルツォフの云うように、ノホルが主人のもとを去る自由がある程度残っていた、ということも事実であつたろう。

このような流動的な状態は、チンギスが長城以北の遊牧民をその指揮下に統一した時に、終りをつげた。最後まで抵抗したジャムカは、反チンギス同盟を結成し、そのグル・カン（あまねくカン）に推されたが（第一四一節）、チンギスとの決戦に破れ、遂に自らのノホルたちに裏切られて、彼らの手によりチンギスの陣営に引き渡される。チンギスは、「己が主君に手を掛けたものどもは、その親族にいたるまで、斬らしむべし」と命じ（ここでのノホルは、すでに完全に臣下の身分である）、ジャムカに対しては、昔の友情を想起して、ふたたび仲よくなろう、と提議する（ここでは *nökhöc* が使われている）。しかしジャムカは自分が生きていれば、「黒き夜には、アンダの夢〔の中〕に入り、明るき昼には、君が心をわずらわす」ことになろう、といって、名誉ある形で処刑されることを望む（第二〇〇、二〇一節）。

このやりとりのなかでも、二人は互いに、ジャムカ・アンダ、カン・アンダと呼びあっている。しかしチンギスは「仲よくしよう」とは云つても、再びアンダの盟をあらたにしようとは云わない。ここでは *nukhoco* が動詞形で使つてあり、チンギスがジャムカに臣下としてのノホルになることを求めた、とは云えないにしても、ジャムカ自身が認めているとより、チンギスが全モンゴル族のハーンに決つた上は、ジャムカが彼と対等者であることは、もはや不可能となつた。チンギスの下につくことを肯んじないかぎり、ジャムカの存在はチンギスにとつて「衣の襟の虱」、「樞の刺」——つまりライバル——とならざるを得ない。それを自ら知りぬいているジャムカには、死を選ぶより外に道はなかつたのである（第二〇〇、二〇一節）。

こうして見ると、テムジンとジャムカは、アンダであつたにも拘らず対決したというよりも、アンダであつたからこそ、状況の発展によつて最後の対決に至らざるを得なかつた、と云えよう。もちろん、牧地の選択についてのジャムカの謎めいた言葉（第二一八、一一九節）、さらに、ジャムカの弟タイチャルが、馬を盗みに行つてチンギス側の者に殺されたこと（第二二八節）も、二人の反目を促進したにはちがひなからうが、モンゴルの統一が進み、頂上に一つしか席がなくなつた時、同格であつた二人のアンダは片方が従属的地位を甘受しないかぎり、仇敵として相対さなければならぬ。

チンギスのアンダはジャムカ一人ではなく、テムジンの下に最初に参集した部族長のなかでも、最も有力な首長の一人であつたクイルダルも、初期にはテムジンの重要な同盟者で、アンダとなつてゐた。しかし、チンギスが勢力を増し、ハーンとなつてからは、相変らずチンギスをアンダと呼んではいたが、彼の臣としての身分を受

け入れた（第一七一節）。高文徳はアングを「階級分化進一步激化之産物」で、利益關係が一致した者どうしの相互利用を目的とした同盟と説明し、両方の実力の差により、「彼此的地位也不平等的」として、その例にクイルダルをあげている（七二―三頁）。しかしこれは、アングとなる時点においての上下關係というより、その後の両者の実力の変化によって生じた身分の開きと見るべきであろう。

『秘史』が書かれた頃には、チンギスへの従属を頑固に拒否したジャムカ・アングの行動が、モンゴル統一の過程における避けがたい悲劇として、理解され、同情されていたのであろう。『秘史』の第二〇〇節、第二〇一節に見られるジャムカの劇的な陳述は、『秘史』の作者の創作でもあろうし、ジャムカ自体をも架空の人物とする説もある。しかし、もしそうであるとすれば、『秘史』に描かれているジャムカは、都合の悪い歴史的事実に煩わされることなしに、チンギスによるモンゴル統一以前のモンゴル人の思想や価値意識を、純粹な形で表現しているとも云えるであろう。

五 アング關係の消滅

『秘史』には、ジャムカの死後、過去の出来事を想起する以外には、アングの語は一度も現われない。アング關係の消滅は同時に、ジャムカの評價の低下を伴った。後世の文書は、そのほとんどすべてが、チンギス帝国の下で書かれた關係上、ジャムカを主君に敵対した逆臣としてしか扱っていない。『元史』も『聖武親征録』も、ジャムカがチンギスのアングであったことを明記しておらず、ただ『聖武親征録』に一ヶ所、「否則遣一人札木合按

答……(以下略)……」(五八葉、一二二頁)とあるだけで、この両書では、ジャムカはオン・カンの暗殺まで謀ったことになっている(『元史』本紀一、一一頁、『聖武親征録』六二葉)。ラシッドでもジャムカは狡猾な裏切り者で、最後にチンギスは昔のアンダを殺すにしのびなく、弟のオッチギンに渡して処刑させる(第一卷、上、一三三頁、一七七頁。下、一二二―一二頁、二七七頁)。

ルプサンタンザンの「アルタン・トプチ」によると、アンダという語は使ってあっても、ジャムカは最初からチンギスの臣下として描かれている。ジャムカは敗北の後、自分を裏切ったノホルたちの助命を乞い、「黒い奴隷(彼自身)」が、ハーンに敵対しようとした事を悔いて、罪を認め、罰に服する(モスタールトII、五四―五頁。シャグダル、一三二―一三頁)。ところで、『秘史』では、「黒き老鴉(ジャムカを裏切ったノホルたち)」が「己が主君(ジャムカ自身)」に手をかけた事を歎いているのである(第二〇〇節)。両書のこの部分に見られる比喩の類似と、それが全く逆の人物にあてはめられている点から考えると、「アルタン・トプチ」の作者が『秘史』の記述を彼の時代の価値体系に合わせて改作したのではないかとさえ疑われるのである。サナン・セチエンの「エルデニン・エリヘ」(『蒙古源流』)には、ジャムカは一度も登場せず、アンダの語も見あたらない。

ところで、ノホルと同じく、アンダもまた格下げの経過を辿ったらしい。岡田英弘氏のご教示によれば、満州朝廷では、皇太子の御学友がアンダと呼ばれていたとのことである。またモンゴルでも、アンダは親しい関係を示すのに用いられ、「アンダ兄」^ブ「アンダ弟」^ドの語も辞書に出ている。モスタールト師の『オールドス語辞典』では、アンダは「frère jure」となっており、『オールドス口碑集』には狐とハリネズミと蛙がアンダになり、三匹の誰が

兄になるかを決めるために、溝の飛びこえくらべをする説話がある（一一四頁、仏訳一六六頁）。こうした近年での使い方が、ヨーロッパ語の brothers の持っている平等性と重なって、アンタを義兄弟とする解釈が一般化したのではあるまいか。

（本稿は、Journal of the Anglo-Mongolian Society Vol.VIII, No.1 & 2 Dec. 1983. に発表したものに基いている。）

引用文献

日本

『モンゴル秘史』（村上正二訳 平凡社全三巻 昭和四五年、一九七二年、一九七六年）。

『成吉思汗実録』（那珂通世訳 大日本図書 明治四〇年）。

ウラジミルツォフ『蒙古社会制度史』（外務省調査部訳 生活社 昭和十六年）。

『蒙古語大辞典』全二巻 蒙和之部、和蒙之部（陸軍省 昭和八年、国書刊行会 昭和四十六年）

中国

『蒙古秘史』校勘本（額尔登泰烏 雲達賁校勘 内蒙古人

民出版社 一九八〇年）。

『新訳簡注『蒙古秘史』（道潤梯歩 内蒙古人民出版社 一九七九年）。

『蒙古秘史』詞彙選訳（額尔登泰烏 内蒙古人民出版社 一九八〇年）。

『元史』本記卷一、太祖（商務印書館中華書局 一九七六年）。

『聖武親征録』（王国維編著『蒙古史料四種』正中書局印行 台北 中華民國五十一年、所収）。

『遼史』卷十五 本記第十五 聖宗六（中華書局版 一九七四）。

王国維『觀堂集林』卷第十六 史林八（北京 一九三四年）。

高文德『蒙古奴隸制研究』（内蒙古人民出版社 一九八〇年）。

『新訳三國演義』テムヤトにちる蒙古語訳(蒙文書社 黄
巳年九月)。

(中国式略字は日本の慣用漢字に改めた。)

モンゴル人民共和国

МОНГОЛЫН НУУЦ ТОВЧОО (Ц. Дамдинсүрэн, Улаанбаатар,
1977) .

Агтан Товч (Ц. Шагдар, Улаанбаатар, 1956) .

Бүгд Найрамдах Монголын Ард Улсын түүх I
(Улаанбаатар, 1977) .

МОНГОЛЫН ХЭЛНИЙ ТОВЧ ТАЙЛБАР ТОЛЬ (Я. Цэвэд,
Улаанбаатар, 1966) .

ソビエト連邦

ЮАН-ЧАО БИШИ (Б. И. Панкратов, Москва 1962) .

Рашид Адин: *Сборник Летописей*, (Л. А. Хетагунов &
Смирнова, Москва, 1950-60) .

Вадимирцов, Б. Я. *Общественный строй Монголов*
(Ленинград, 1934) .

Гумилев, Л. Н. «Тайная история монголов XII-XIII
вв.» (*Татаро-Монголы в Азии и Европе*, Москва,
1970, pp. 455-474) .

ブ ン タ 考 磯 野

Мунжув, Н. Ц. “Заметки о древних монголах” (*Татаро-
Монголы в Азии и Европе*, Москва, 1970, pp. 352-
381) .

Юшков, П. С. “К вопросам о дофеодалном (“Варварском”)
государстве” (*АН СССР, Вопросы Истории* VII, 1946) .

ユニバーシティ

Alan To'bi (A. Mostaert & F. W. Cleaves, Harvard
University Press, 1952) .

Pelliot, Paul: *Histoire des Campagnes de Gengis-Khan*
(Leiden, 1951) .

.....

Beowulf (translated by M. Alexander, Penguin Clas-
sics, 1973) .

Bonte, Pierre: “Les éleveurs d'Afrique de l'Est, sont-ils
égaitaires?” (*in Production Pastorale et Société*, No.
9, hiver 1981, pp. 23-37) .

D'Ohsson, C.: *Histoire des Mongols*, 4 vols. (La Haye
et Amsterdam, 1834-5) .

Evans-Pritchard, E. E.: *The Nuer*, (Oxford University
Press, edition 1979) .

Foote, P. G. & Wilson, D. M.: *The Vikings Achievement*,

(London, edition 1980) .

Homeyer, H.: *Attila, der Hunnenkönig* (Berlin, 1951) .

Mostaert, A.: *Textes oraux ordos* (Peiping, 1937) .

Folklore ordos (Peiping, 1947) .

.....

Kowalevski, J.E.: *Dictionnaire Mongol-Russe-Français*, 3 vols. (Kazan, 1844-49) .

Mostaert, A.: *Dictionnaire Ordos*, 3 vols. (Peiping, 1941-44) .

de Rachewiltz, I.: *Index to the Secret History of the Mongols*, (Indiana University Press, 1972) .